

---

**法輪寺の薬師如来像と伝虚空蔵菩薩像について**

---

奈良・法輪寺の薬師如来像と伝虚空蔵菩薩像は、飛鳥時代の樟材製による木彫像の代表作として知られている。法輪寺は、昭和19年に焼失した三重塔の建築様式や出土瓦の編年から、7世紀後半に現在の伽藍が造営されたと推定されている。両像に関する先行研究では、そうした考古学、建築史学の知見に加え、670年以降の法隆寺再建期の造像に通じる特徴が見出せることから、両像を7世紀後半のほぼ同時期の制作とみる意見が多い。しかし、両像の相違点に着目し、そこに年代差を想定する意見も提示されている。また、両像の像容に関して、法隆寺の金堂釈迦像と百済観音像にそれぞれ類似することが指摘されているが、その意味するところや制作背景については必ずしも十分な議論が行われていない。

本発表では先ず、先行研究で指摘された両像の耳の形や面部、体部の抑揚等に見られる相違点に着目する。これまではその相違が両像の年代差に関わるとみられてきたが、両像が類似するとされる法隆寺像に比べると、その相違が生じたのは薬師像が金堂釈迦像を、伝虚空蔵像が百済観音像を忠実に写した結果であることが判明する。一方、そうした相違点が存しながらも、二重瞼の目や一文字に引き結ばれた口元の形、衣文の彫法など、尊格に関わらない点においては多くの共通性が指摘できることから、両像はむしろ積極的に7世紀後半のほぼ同時の制作と考えることができるだろう。

両像には法隆寺像とは異なる新たな要素も認められる。薬師像の大衣の下に別の衣をつける着衣形式は、大西修也氏によって韓国全羅北道益山郡蓮洞里の百済石仏との共通性が指摘されているが、とくに右前膊にかかる袖状の衣や着衣に混乱が多い点には、三国時代末期の様式影響を強く指摘できる。これに関して注目されるのは、法輪寺から出土した7世紀後半期の文字印刻瓦が、殊に陽刻で周縁を表す印刻形式を有する点において百済末期の印刻瓦に近似し、かつ印刻された文字が百済系の氏族名を示す可能性があることである。すなわち、7世紀後半における法輪寺の造寺造仏の背景には、百済末期の造像様式や造瓦技術を受け継ぐ工人や、寄進者・協力者としての百済系氏族の関与を想定することができる。

法輪寺が造営された7世紀後半は法隆寺再建期に重なる。この時期、斑鳩諸寺院では瓦や塔の様式がすべて法隆寺式となり、斑鳩地域が一文化圏を形成していたとの指摘があるが、造像様式についても同様で、出土埴仏や塑像の研究から7世紀中葉には大陸から唐様式が直接的に流入していたと指摘される飛鳥地域に比べ、斑鳩では飛鳥前期以来の様式や図像の伝統が強く保持されていたとみられる。本発表では、法輪寺の薬師像、伝虚空蔵像をそうした斑鳩地域における造像という文脈からも捉え直すことによって、法隆寺の古像を模しつつ、他方では新たな百済様式が受容されたことの意味についても言及したい。